

梅田は昭和十二年から十五年の頃まで戸数僅かに四・五軒に過ぎず、家屋の位置によって搦北・中割・今町の各字別に所属していた。終戦後は外地からの引揚者や今町その他の村からこの土地に移住して来た。かくて昭和二十五年の頃は、「搦北」の名称となり戸数も二〇戸から三〇戸近くに増加した。昭和三十四年一月、当時の村長故碓壮次の頃「搦北」を改称して、新しい「梅田」という字の命名式と共に、新築成った公民館で盛大な竣工式が挙行された。ここに「梅田」という新しい邑が誕生したのである。

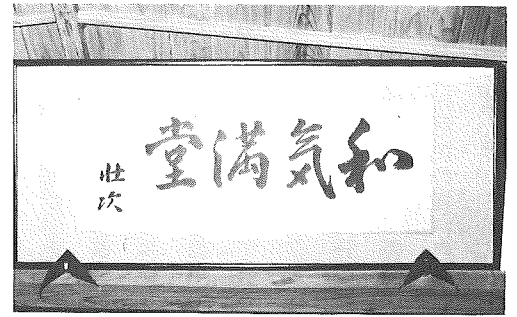
この梅田の地形は南北に細長く、東部を八田江川に面して川副町広江と相對し、北は今町、南は搦に近接している。この「梅田」という村名については、左記のような因縁がある。即ち昭和三十三年四月当時の区長山田耕平（現在町議会議長）がこの村落の青年たちに自宅に集まって貰い、その名称について無記名での募集をしたのである。この時面白い名称が出て来たがその中で「日の出」「朝日」「梅田」の三つが一番上位に浮かび出た。この三つを更に慎重に詮議したが、その中で新宮に天満宮を祀ることに決めていたことから天満宮に最もゆかりの多い「梅田」という名前が決定したのである。その名付親は、西村宗太郎（現在五七歳位・広江に居住）であった。

区長（今日の連絡員）は、初代Ⅱ小柳政七（現在佐賀市在住）二代Ⅲ三浦栄治、三代Ⅳ宮副武一、四代Ⅴ高柳重三郎、五代Ⅵ山田耕平、六代Ⅶ北村豊を経て現在の第七代の吉田謙一郎に至っている。世帯数は三七であるが、水産業が一番多く九、次にサービス業Ⅵ、公務員Ⅳ、その他製造業・卸小売・運輸通信・教職等で、農業はただ一戸に過ぎない。

この村の南部広江橋に近く、梅田公民館がこの村発祥当時に見事に建立された。その南側の境内に氏神様として、菅原道真公を祭神とする天満宮がある。新しい村作りはよい子を育てることにある——ことから幼年時代からよく勉強に励み将来この村落を背負って立つ立派な人間になってくれよ——と祈念して、まずは天満宮を祀ったのである。この天満宮の外に境内に身代り観音を祀ってある。昭和四十九年七月にこの邑の三歳になる女の子が交通事故に遭って死亡したことから悲しみに耐えず遂に身代り観音の建立となったのである。

氏神としての天満宮祭は毎年十月二十五日、夏祭りの祇園は八月十三日、観音祭は八月七日が例祭日である。例祭に必要な経費は、各家々から徴収したり寄付するのではなく、日頃普段に上がったお賽銭さいせんで賄い年間の四万円ぐらいで楽にできるとの事である。また毎日毎日のお茶・お水・御仏飯等は当番制で家廻しに用意し、次々に諸道具を送ることになっている。この村でも以前は子供の行事として、この境内にほんげんぎょうもやったが今日では廃止している。

公民館の新築には何分にも終戦後のことであつたため相当の苦勞が多かつた。一度に多額の金を集めることは到底不可能のために、最初は各戸から五円宛の日抜き貯金を始めた。所で自分たちの力でこの大事業完成を目指しており村落民の強い自覚と堅い決意もあつて、予想以上に貯金は殖えていった。やがて五円から一〇円に更に二〇円と値上げして約八カ年間の後には三〇円と格上げして見事に総合計約二十五万円の貯蓄高となつた。これ



碓町長の祝いの書額

が公民館建築の基本金である。土地建物の経費合計約七十万円也を使ったが、わが村の農協から四十万円也を借用し多少の予備金もあって立派な公民館が完成しその落成式が行われたのである。その当時は年々と物価が上がる時代―高度な日本の経済成長の時代だったので、思い切って借金をして敢行したことが幸いしたのである。この喜びは思えば村落梅田に居住した人々の団結と決意にあった。全く苦節二十年の汗と油の結晶であったのである。

昭和三十四年一月吉日新村の誕生を祝って、盛大な祝賀式を開催した。時あたかも新春を迎えて間もなく、初潮の満ち来る八田江には大漁の幟を押し立てた幾十艘の入船が朝陽に輝いていた。新装成った晴れの公民館には、万国旗のはためく中、参議院議員福岡日出磨をはじめ村内外の来賓や梅田の大人も子供も相集りて、豪華な公民館の新落成を祝い、梅田村誕生という華やかな式典であった。その時の記念に当時の村長碓壯次は「和氣満堂」・教育長故副島忠一は「大和一致」の掛軸および中学校長故山口孝行の「梅の絵」小学校長鶴 清の「村誕生す苦節二十年今朝の春」―の祝句等を寄贈して、新興村の誕生を祝福した。梅田と八田との間を流れる八田江は、元は随分広がったが、大正十三年の頃は渡し舟であった。この渡し舟も一艘だったので、兩岸よりこの船に綱をつけて置き、渡りたい客人がこの綱を引っ張っては川を渡ったものである。現在の橋がかかったのは昭和三十五年の頃でこれに依って、東与賀と川副との交流がはじまり交通上、産業

上その他日常生活にも非常な便益を被った。もともとこの梅田の土地は、八田江改修の際泥土の置き場として積み上げられ、その後は堀と堤防の中間に広い埋立地を作った。この埋立地が戦後になって有償登記されて、新開拓地となったのである。

一一 上古賀

上古賀は東与賀町内では最北端に位置し、北は佐賀市本庄町鹿の子と境し、東は鍛冶屋に西南は田中および下古賀に隣接している。現在の世帯数二七であるが、農業・製造業・建設業・公務員・卸小売・寺院等、農村集落としては多種多様の職種である。

上古賀という地名については、古来この周辺一帯は窪地であつてその「窪」―が「空閑」となまり、更にその「くが」が「古賀」に変わったものと言ひ伝えられている。貞享四年（一六八七）の郷村帳には、田中村の小字に「上古賀・新村」と記載されている。

古老（故船津丸忠作）の談話によれば、現在地の子供遊園地付近は昔より天神屋敷と呼ばれ、雑木山の中に小さい祠を祀つてあつた。その境内中央に幹の胴回りが大男五人で手をつなぎ合せてやつと抱きかかえる程に大きい楠の巨木が天空にそびえ立っていた。樹齢も幾百年を数え、遠く南方の有明海を航行する船舶や漁船が、北方を見定める目標であつたらしい。この楠の大樹も後日伐採され売却されて、現在の八幡神社新築費用や免田購